

## どこまでも低くなる 詩篇 113:1-9

2022. 4. 3 (卯月) 丘の上 NO. 678  
春日部福音自由教会 山田豊

カトリック司祭古巣薫師の著書「ユスト高山右近—いま降りていく人へ」は、キリシタン大名であった高山右近が、地位も名誉も捨てて人々に尽くし、南海のマニラに流される生涯を描いた本です。お殿様なのに、街の人たちのところに降りていった、これをイエスキリストの生涯に重ねているのです。

このようなタイトルと本日の説教題は、キリスト者の霊性にかかわるものだと思います。教会のことに限らず、広く人としての生き方にかかわる、と置き換えてもよいものです。

本日のテキスト、詩篇 113:5-6 は、高い座に着いている神が低い所に降りてきたことを語っているみ言葉です。結論とも言えますが、ピリピ 2:6-8 に描かれているイエスキリストの生涯と重なります。「**キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。**」

特に6節の「身を低くして天と地をご覧になる」というのは、地面と同じ目線になって地の上にある人々を見、そこから顔を上に挙げて、空のはるか向こうの天を見る、というイメージです。その具体的な例の一つが、7,8節です。あくたというのは、イスラエルにあったごみを焼いたときに出る灰の捨て場のことです。貧しい人は、寒い夜にはそこに横たわって暖を取ったということです。言葉として、塵やあくたは、役に立たないもの、無益なものを表しています。そういう扱いを受けている人が、王と同じ座につけられるということです。もう一つの例が、9節です。旧約の時代では、不妊の女性は神に顧みられておらず、離縁の理由ともなりました。サムエル記にあるハンナの祈りは、切実なものだったのです。しかしそのような女性をも神は顧みてくださるということです。今日に当てはめれば、養子縁組によって子をもうけ、新しい家族となることと言えるでしょう。

3月の末に、障害のある子の養子縁組に取り組んでいる牧師夫妻の働きが紹介されている番組がありました。障害のある子どもを産んだお母さんも、大きな苦しみを負っているのです。時には、その子を殺してしまいたいと、自分でも恐ろしくなるようなことを考えてしまうということです。しかし、その先生は、そういう人たちに寄り添い、自ら障害児を引き取っているのです。その働きのモットーは「うちに帰ろう」というものです。捨てられていい子供は、いないのです。この先生もまた、低い所に降りてこられた方なのだと思います。

引用聖句

レビ記 4:12 すなわちその雄牛の残りすべてを、宿営の外のきよい所、すなわち灰捨て場に運び出し、薪の火で焼く。これは灰捨て場で焼かれる。

1サムエル 2:8 主は、弱い者をちりから起こし、貧しい者をあくたから引き上げ、高貴な者とともに座らせ、彼らに栄光の座を継がせます。まことに、地の柱は【主】のもの。その上に主は世界を据えられました。

ピリピ 2:6-8 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。

ルカ 1:47-55 マリアは言った。「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます。この卑しいはしために目を留めてくださったからです。ご覧ください。今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです。その御名は聖なるもの、主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます。主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました。権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました。主はあわれみを忘れずに、そのしもべイスラエルを助けてくださいました。私たちの父祖たちに語られたとおり、アブラムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに。」